

組織改編と 人事異動

4月1日付けで組織改編と人事異動を実施。

本市がまちの将来像として掲げる「ITを活用した心を通う便利で豊かな田舎暮らし」の実現に向け、さまざまな取組を進めています。これまでの行財政改革を土台に、今年度は、高等教育機関や民間企業など多様な主体との密接な連携のもと、市民や事業者とともに、感染症に打ち勝ち、乗り越える、持続発展可能な「ビヨンド・コロナ社会」の構築に向け、積極果敢に挑戦するために必要な組織改編と人事異動を行いました。

副市長に沼田行博氏

山口寛士氏の副市長任期満了に伴い、元京都府農林水産部長の沼田行博氏を任命。豊富な行政経験、卓越した行政手腕のもと、堤茂副市長とともに、今後の市政運営に取り組みます。



教育長に奥水孝志氏

奥水孝志氏の任期満了に伴い、奥水孝志氏を教育長に再任命。長年にわた

る教員としての経験、これまで3年間の教育長としての実績のもと、引き続き市と教育委員会が連携し、本市教育のさらなる振興に取り組みます。

組織改編など

- ◆舞鶴市SDGs未来都市推進本部「ITを活用した心を通う便利で豊かな田舎暮らし」を実現するための施策を展開し、持続可能なまちづくりを進めていくにあたり、さらなる庁内横断体制の強化と多様な連携促進のため「舞鶴版 Society5.0推進本部」を「舞鶴市SDGs未来都市推進本部」に再編成し、より全市的な取り組みへと発展させます。
- ◆新型コロナウイルスワクチン接種推進課：新型コロナウイルスの発生と重症化予防への決め手となるワクチン接種を速やかに実施することで、市民の健康を守り、いち早く安心感を持ってもらえるよう、健康・子ども部に、新たに設置。安全で円滑な接種の実施を強力に推進します。
- ◆デジタル推進課：情報システムの標準化・共通化をはじめ、行政手続のオンライン化、データ活用など市役所業務のICT化を推進し「ITを活用した心を通う便利で豊かな田舎暮らし」を実現する施策をさらに推し進め

ていくため、情報システム課をデジタル推進課とし、デジタルガバメント化を積極的に推進します。

- ◆改革推進担当課長：「財源」施設「人材」で実行してきた行財政改革を後戻りさせることなく「持続可能な市役所運営推進プラン」に基づき、組織体制・人材配置の適正化など、人事と一体となった戦略的な行財政改革を推進し、行政運営の最適化に取り組みます。
- ◆企画開発担当課長：赤れんがパーク周辺一帯を、年間150万人が訪れる日本海側を代表する一大交流拠点とすることを目指す「赤れんが周辺等まちづくり事業」のさらなる推進をはじめ、将来を見据えた新施策などの企画、開発を積極的に推進します。
- ◆花と緑のまちづくり・環境整備担当課長：自然文化園を、舞鶴らしい自然環境や景観保全に配慮した新たな自然文化園として活性化するため、指定管理から直営とし、舞鶴の自然を活かしたまちづくりや街路などの環境整備を推進します。
- ◆総合文化会館・陶芸館を直営化：文化振興基本計画に基づく施策と各施設の運営の連携により、さらなる地域文化レベルの向上を図るため、総合文化会館と陶芸館を指定管理から直営に。市民が文化に親しむ拠点施設とし

て機能強化し、文化のまちづくりを積極的に推進します。陶芸館の館長は、陶芸家の高井晴美氏。

- ◆多世代交流施設「まなびあむ」：子どもから高齢者まで多様な世代が集い、交流する拠点施設として、7月に多世代交流施設「まなびあむ」を開設。6公民館と連携するなかで、高齢者などの健康や生きがいをはじめ、現役世代が地域活動へより深く深く関わることとなる事業を積極的に展開し、新たな地域づくりの担い手の創出、育成につなげます。

人事異動

異動の規模は正職員774人中243人。令和2年度の退職者は42人、令和3年度の採用者は19人。正職員数は797人から774人へ、23人の減。

【部長】(内は前役職)

- ▽消防長(西消防署長) 岡山寛▽総務部長(東京事務所長(旧軍港市振興協議会派遣)兼産業振興部次長) 桑垣義亮
- ▽福祉部長兼福祉事務所長(総務部次長兼総務課長) 杉本和浩▽建設部長兼建設部次長兼土木課長 田中洋▽上下水道部長(上下水道部次長兼水道整備課長) 新谷哲也



まいづる元気人

Vol.85

子ども達が

「帰りたい」と思いまちに



株式会社ホリグチ
堀口 宏之さん

子ども達の笑顔を増やしたい

「高校まで大丹生で育ちました。通学は船やバイクだったという話を市外の友達にするとすごく食いつかれるんですよ」と笑顔で話す。「大学や就職で一度舞鶴を離れたましたが、友人を舞鶴に連れて来た時に、景色の良さや魚介類のおいしさを皆絶賛してくれました。離れて気付いた舞鶴の良さが、現在の舞鶴愛につながっています」。都会で就職したが、父の会社を手伝うため帰郷。従業員として働いていたが、父が病気を患い、手術。それをきっかけに経営者として覚悟を決めたそう。青年会議所の活動にも参加し「青少年の健全育成を重点目標とする青年会議所での経験が今の考えの礎になっています。特にちびっこソフトや舞鶴かるたなどの事業を通して、子ども達やそれを取り巻く大人の笑顔をたくさん見るにつれ、子ども達の笑顔が増えればもっとい

いまちになると強く思うようになりまし」と転機を話す。同所の会員は40歳までだが、卒業した後も観光協会やPTA活動、ふるさと納税事業、市民に舞鶴への愛着を形成するシティブランディングなど、まちづくりに積極的に参加。「青年会議所時代の人のつながりも活かしています。OBは各種団体の重要なところにおられ、先輩に引っ張り上げていただくことも多いです。おかげでさまざまな経験ができたし、新たな出会いが生まれたりと縁には感謝しています」と語る。

また子育て世代の働き方にも柔軟さを示す会社で、子育てをする時間はソフトを外す、リモートワークをするなど働きやすい自由な環境を整える。「『まいづる』は子育てをする従業員が作ってくれたんです。子育て世代の人は、勤務体制や時間を柔軟にすれば優秀な人材が集まりますし、地域にとっても活用しないともったいない資源だと思えます」と経営者の視点は抜群だ。

傍観者ではなく当事者として

若いころは都会へ出て都会で働きたい思いが強かったと話す。しかし今は「子ども達が帰ってきて働きたいと思つて会社の選択肢の一つになれるよう、働く環境を整えたいと思います。行政任せになつたり、傍観者になつたりすることなく、



▲舞鶴かるたで賞品を渡す堀口さん



▲シティブランディング会議で積極的に発言

プレーヤーとして子ども達が帰ってくる場所をつくり、市外から移住者がきてくれるような会社になりたいです」と意欲を燃やす。子どもと親の笑顔を望む姿からは、舞鶴の未来を照らす明るさが溢れていた。